

あしよろ・ハードサポート通信

1番草は、収量は例年より少ない印象ですが、天候に恵まれ、比較的順調に収穫作業が進みました。7月は35℃超の日が続き、雨を迎えてようやくひと段落…それでも暑い毎日です。牛舎の暑熱対策は万全ですか？ウシもヒトも、熱中症に注意！です。

◆ ニュージーランドの放牧



先月、ニュージーランド（以下NZ）の牧場に訪問する機会がありました。どの経営もコスト意識が非常に高く、想像していたよりも洗練されていたのが印象的でした。

NZの1戸当たり搾乳牛頭数は約400頭、1戸当たり面積は144haで、北海道より飼養規模が大きい上、農地面積に恵まれています。訪問したオークランド近郊は冬でも気温は10℃前後で積雪がなく、一年間を通して放牧地を活用できるそうです。



写真は放牧地の様子です。ペレニアルライグラス主体で裸地が少なく、密度が高いことに驚きました。南半球ですので、撮影当時の現地は初冬です。

◆ 放牧地の牧区管理と飼料給与



左は、ある牧場の圃場見取り図の一部です。1.5~2.5ha ずつ区切られた約60牧区の状況が一目でわかるようになっていました。この全放牧地の乾物草量を「ライジングプレートメーター」を使って毎週1回量り、牧区編成や滞在させる頭数・日数を計算して、1週間の放牧スケジュールを組む、という作業を1年を通して繰り返すのだそうです。



ライジングプレートメーター (NZ サイト)

<http://jenquip.co.nz/products/filips->

[electronic-folding-plate-meter-ec09](http://jenquip.co.nz/products/filips-electronic-folding-plate-meter-ec09)



写真↑：ライジングプレートメーター

例えば 200 頭の搾乳牛がいて、乾物摂取量が 20kg/日だとすると、 $200 \text{ 頭} \times \text{乾物 } 20\text{kg} = 4,000\text{kg/日}$ の乾物飼料が必要です。

このとき乾物量 1,800kg/ha の牧区を 2ha 使うと、乾物 3,600kg を確保できますが、必要な乾物 4,000kg には 400kg 足りません。この不足分を「サプリ」で補い、過不足なく乾物を給餌することを目指していました。

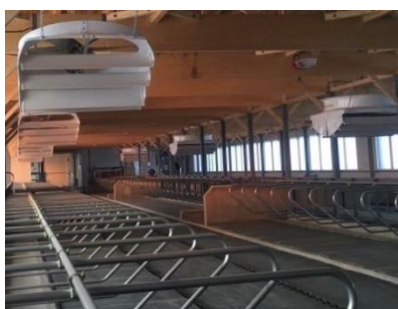
現地の酪農家さんが「サプリ、サプリ」と言うので、特別な添加物か何かかと思ったのですが、実物は北海道で言う「TMR 飼料」でした。写真は飼槽の様子で搾乳後、



ここを通る配置になっており、デントコーンとグラスサイレージ、ビール粕、キウイフルーツ、パーム核粕、ミネラル類などがミキシングされていました。

NZ は季節繁殖が一般的で、冬は一斉に乾乳期間を迎える経営が多いのですが、この牧場は冬も生乳出荷をしており、訪問時は TMR のウエイトが高いタイミングでした。(続)

☆来月は NZ の乳価や乳牛のタイプ、季節繁殖の話題を紹介します



◆ 暑熱対策、北海道でも換気扇は必須アイテム

遺伝改良されている現代の乳牛と 10 年前の乳牛を比べると、生産量が大幅に伸び、体内の代謝量もとて高くなったと言われています。つまり、現代の乳牛の方が「暑さに弱く」なっているのだそうです。

短い夏とは言え、北海道の牛舎にも換気扇は必須アイテムになりました。最近では、写真の大型サイクロンファンを設置する牧場も増えています（足寄にもあります）。単価は高いですが、広くしっかり風を送ります。



下は、牛体に水をかけたときの様子です。水がかかっても乳房が濡れない毛並みになっているのがわかります。換気扇で風を送りながら、水での冷却を組み合わせると、乳牛の体温を効果的に下げることができます。

(久富聡子)